脇役主人公から見た彼ら

笑えばいいと思うよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
脇役主人公から見た彼ら

【Ｎコード】
Ｎ１６５０Ｓ

【作者名】
笑えばいいと思うよ

【あらすじ】
主人公が美少女達囲まれて青春を送ります。

嘘です。

始まり（前書き）

初めてのラブコメ？です。
駄文ですが、よろしくお願いします。

始まり

いきなりですが、今俺はと～～～～～～～っても機嫌が悪いです。えっ何故って？それは、海より深～～～いわけがある。……すいません、嘘です。ただの僻みです。

だって普通、学校に登校してくる時に美少女二人とイチャイチャするヤツがいますか？いいえ、いません。多分、……いないと信じたい。という事でヤツに襲撃することにしましょう。

「準備はいいか、お前ら！」

『おぉ～～～！！』

何処からか、いきなり現れた謎の軍団。……いや訂正しょう、モテない奴らだ。

「よし、突撃だ！！」

俺が合図を出すと、モテない軍団は一斉にアイツに向かって行った。

ここで、俺の自己紹介でもしょう。名前は高橋　昌哉どこにでも居

る普通の高校生だ。っと自己紹介している内にモテない軍団は倒されていた。俺？俺は、行かないよだってアイツ有り得ない程の身体能力あるから、わざわざ倒されるの分かってるのに挑まないし、それに俺、もやしっ子だし（笑　そろそろアイツに声かけるか

「よっ、朝から大変だな。」

「おい、何が「よっ朝から大変だな。」だよ、これ全部お前の仕業だよな？」

今俺が、声かけた奴、それがスーパーイケメンボーイこと木村　悠司　何でも完璧にこなし、性格も完璧、そして、鈍感。どこぞの主人公みたいにモテるヤツだ。

「それって本当なの？」

「本当だった許さないよ」

今俺に話しかけてきた奴らは、東山　奈央と中谷　美奈だ。何故悠司に惚れているかというと、ナンパされている所を助けられてみたいな感じだ。

「よ～く聞いてくれ、東山さん、中谷さん。」

「西山だよ。」

あれ？西山だっけ、どっちでもいいじゃん。

「とにかく聞いてくれ、悠司が襲われている時は、必ず君達を守るはずだ、それに…」

俺は、二人に近付きボソッと言った。

「怖いとか言って抱きつく事だって出来るチャンスがあるじゃん。しかも、悠司が闘ってる姿見えるし」

二人はしばらく考えて

『うん、じゃあ良いよ。』

「そうだ、もっと言ってやれ…って、えぇ～～～～～～～！？

何許しちゃってんの？さっきまで、怒っててくれてたじゃん。」

何故か急に悠司が騒だした。

「じゃあ、俺先に学校行くから。」

悠司達に手を振りながら、俺は、学校へ向かった。

学校に着き、自分のクラスに入って、席に座るといきなり悠司よりは劣るが、かなりのイケメンが話かけてきた。

「相変わらずだよなぁ～自分は動かないで他の人を使って襲うなんて。」

「そんなに褒めるなよ、照れるだろ。」

「いやいやいや、褒めてないし、どちらかと言えば貶してるから。」

そうだったのか…俺は褒められたと思ったんだが。……ここで、今俺と話をしているイケメンは、藤森　大地。陸上部のエースらしい。

「そうそう、俺が追わせた女子達はどうだった？」

すると大地は、やはりお前かみたいな目で見てきた。

「やっぱり、マサだったんだな！あれ結構、怖かったんだぞ！！こっちは全力で走ってるのに、ピッタリっと付いてくるし……」

思い出したのか、顔が真っ青になっていた。確かに怖いよな、陸上部のエースが全力で走ってるのに、付いてくるのは……すげぇな恋する女子の力は、

「おはよ～」

おや、リア充こと悠司が爽やかに登場してきた。しかもクラスの女子達の大半の目がハートになってるし……リア充なんて氏ねばいいのに。てか氏ね。

「死ね～～～～～～悠司！！」

等と思っていると、1人変態が悠司に殴りかかった。しかし、悠司にカウンターを喰らい一発K．O．した。俺は、変態もとい亮輔に近付いた。コイツの名前は、飯塚　亮輔、大の女好き、変態だ。

「お～い。大丈夫かぁ？」

亮輔の顔を叩きながら聞いた。

「全然大丈夫たぜ」

意識が戻ったのか、俺に向かって答えた。

「チッ…無事なのかよ。」

「えっ、心配してくれたんじゃあないの？つーかいつまで叩いてるんだよ！」

「ん？あっ悪い悪い、しっかしお前もよく懲りないよなぁ」

「男にはやらなければならキーンコーンカーン…」

亮輔が喋ってる最中にチャイムが被る様に鳴った。すぐに担任がやって来てホームルームが始まった。

時間が経ち今は昼休みだ。

「ねぇ、悠司一緒にお昼食べようよ」

中谷さんが悠司を誘っていた。

「違うよ、悠司は私と食べるの！」

対抗して、東山さんでいいんだっけ？が悠司の左腕に抱きついて、中谷さん向かって言っていた。すると中谷さんも右腕に抱きついて、ギャーギャー言っていた。ちなみに悠司は困惑した表情してる。

クラスの男子達は震えながら『リア充死ね！』と襲おうとしていた。俺はとめにはいった。

「待て、お前達。」

するとクラスの男子達は「とめないでくれ」

「お前はヤツの味方なのか」

「違う、このままでは負けてしまう。だから、筆箱の中からコンパス、ハサミなどを使って攻撃するんだ！！」

俺は無駄に熱弁をした。悠司は俺の発言を聞き「マジかよ」と言い逃げて行った。

「隊長、ヤツが逃げました。」

いつの間にか、隊長になってるし

「絶対に、ヤツに対して一人で挑むな！複数で攻撃をしろ。」

『はっ』

何処の軍隊だよ…そうだ、亮輔がいなかったな　俺の記憶が正しければ、放課後、屋上で告白してる筈だけど。何故わかるかって？だってアイツ、悠司達がイチャイチャしていた時に、俺も彼女作ってやるとか言ってどっか行ったからね。これは行くしかないね。

「出来れば、告白してる時に入りたいな。」

まぁそんなに上手くいかないよな、そう思い屋上の扉を開けた。

「ごめんなさい。」

開けた瞬間に拒否られたし…なんて思っていると、亮輔らしいヤツが泣きながら、走っていなくなった。さて、亮輔が告白した人で見るか。

「あっ、まゆまゆじゃあ、あ〜りませんか？」

「まゆまゆ言うな！てか、昌哉は何の用なの？」

屋上に居たのは、通称まゆまゆ（まぁ俺しか呼ばないけど）こと、相澤　真由。結構な美少女

「告白かもよ。」

まゆまゆは、すぐに否定してきた。

「ないないない、アンタが告白してきたら、ここから飛び降りるわ。」

「マジで、好きだ〜。はい飛び降りて」

まゆまゆは、疲れた様に溜め息混じりに

「…完全に飛び降りることを、楽しみにしてるよね。」

っと言った。　俺が、帰ろうと屋上を出ようとするとまゆまゆが話かけてきた。

「ねぇ久しぶりに一緒に帰らない？」

と恥ずかしがりながら、つーか中学の時も数えるぐらいしか一緒に帰宅してないし、

「じゃあ、鞄取ってこようぜ。」

その後、教室に鞄取って下校した。

イケメンって氏ねばいいのに

何かさ、理由はないけどさ
「妹が欲しかったな」

「何兄貴言ってるんだよ！？しかも実の弟が居る目の前で！！」

今、俺の前で騒いでいる奴こそ　高橋　陽斗　通称ハル。歳は１つ違いで、何故か俺と同じ学校に進学してきやがった。しかもイケメンときた、両親は普通だ……いや、母親は違うか。とにかく何で兄の俺が普通で弟がイケメンなんだ。

「ただ、弟より妹の方がよかったと思っていただけだ。」

「それ弟の前で言いますか！普通。それに弟の方が良いことがあるじゃん。」

「ほぅ、言ってみろ」

「えっ……気を使わなくて済む。」

「家族って、そうじゃあない。」

「後……そう！一緒ゲーム出来る。」

「別に妹でも出来るじゃん。」

「うっ…」

勝ったぜ、何に勝ったのかよく分からないが、やっぱり弟をいじるのは、おもろしろい。

「ねぇ、兄貴話変わるけど好きな人出来た？」

ハルがいきなり質問してきた。しかも俺に恋の話、今まで全くしなかったのに、はっ！…これはまさか

「何だ、好きな奴でも出来たか？」

まっ　つっても毎回聞いてもいないって言ってるし、違うか…これで次の日に彼女を連れてきたら、マジで怒りますね、てか埋める。

「それが……何て言うか…一目惚れ…かな、多分先輩だと思うだけど。」

「どんな感じだ？」

「えっ、無理絶対教えない！。」

コイツ何を勘違いしてるんだ？　あ～俺が邪魔すると思ってるのか、人の恋を邪魔するほど馬鹿じゃあないし多分。

「何勘違いしてるんだ？俺は情報を教えてやるって言ってるんたぞ、知ってる奴ならな。」

「そうなの？じゃあ……」

「多分、そいつは、長谷川　亜稀だ。」

しかし分かりにくい特徴だった。髪は肩より長く、色は黒、とか美人とか、守ってあげたいとか、もっと分かりやすい特徴はと言ったら、周りの人達が顔を赤くしていて中には、鼻血を出してる人もいた。で　分かった、噂では聞いてたけど本当だったんだ、確か笑顔を見たら男女問わず大抵の人は鼻血を出すって……俺、面識ないな。

「ハルには、嬉しい情報、確か、彼氏はいない。クラスは２ー１だったはず」

ハルはガッツポーズをしていた。あっちなみに俺３組ね、まゆまゆは、１組。関係ないか……

「マジで、ありがとう兄貴！」

ハルが笑顔でそう言った。やめろよ、そんな笑顔で見られた……

……殴りたくなる。

「兄貴、その振り上げてる拳を下げて、恐いから。」

……どうやら、実際に殴ろうとしてたみたいだ。反省だ。それにしても、暇だ

「ハル、暇だから外に行ってくるわ」

ハルにそう告げた。とりあえず、デパートに行くか。

デパートに着いてみたら、俺と同じ学校の制服の人がナンパにあっていた。

ん？あれは、さっき話して　長谷川　亜稀ではないですか、噂をすれば何とやらってか？　あれ？何でこっちを見てニャっと笑って、こちらに来やがった。……しまった！今日学校が午前中に終わったから制服のままで来てんだ！　絶対に巻き込まれる！！　逃げなきゃ、ってもう遅かった。目の前に長谷川いるし、しかもナンパしてたヤツも付いて来たし、こんなにいらねぇおまけ初めてだし。

「遅いよ、ずっと待っていたんだからね。」

長谷川が彼女みたいに言ってきた。つーか今日初めて話したよね。

「アンタこの娘の何なの？」

ナンパしてたヤツが聞いてきた。　そんなの

「他人「彼氏」です。」

何か被されたし、しかもナンパしてたヤツをよーく見るとイケメンだし、イケメンがナンパしてんじゃあねぇよ！。

「いいか、そのない頭よーく使って考えてみろ、俺がこんな美人の彼女がいるばずないだろ！！」

「お前それって、説得しようとしてるのか？」

若干怒り気味でいるし、何か間違えたか？　後で長谷川は笑っているし

「だいたい、お前はイケメンのくせに何ナンパしてんだよ！お前のぐらいのイケメンなら、ナンパしなくても彼女の1人や2人出来るだろうが！」

「……何か、すいませんでした。」

「分かればいいんだよ。お前なら、いい彼女作れる、頑張れよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ナンパしてたヤツはいなくなった。……馬鹿で良かった。

「助けて、ありがとう。」

長谷川が笑顔でお礼言った。……確かにこの笑顔は凄いな。

「あん？俺ただ巻き込まれただけだし、じゃあな。」

違う所に行こうとしたら、右腕を掴まれた。

「買い物するために、ここにいたの？」

「いや、ぢが「そうなの、じゃあ行こうか」はぁ」

長谷川に無理矢理買い物に付き合わされる事になった。

何て

「ねぇ、これ何てどうかな？」

只今、長谷川に強引に連れて行かれて洋服屋に居ます。何故に俺に似合っているかなどと、聞いてきるんだ？今日初めて話したヤツに、しかも普通、一緒に買い物とかするか？はぁ～　まっ暇つぶしにはなるか、

「うわ～～超似合ってる」

すんげぇ～棒読みで言ってみたくなったから、言ってみた。どういう反応するか楽しみだ。

「でも、こっちも良いな……」

めっちゃスルーされたし、意外に悲しいもんだな……ん？待てよ今なら、長谷川は服に夢中だから逃げることが「ドコに行くの？」……出来なかった。

「よし、やっぱりこっちにする。」

やっと決まったか、これで解放される、……何故？長谷川は会計しにレジに行かないで、まだここにいる？そして俺の方に服を差し出してるんだ。

「俺に払えと？」

「普通は、彼氏君が払ってくれるんだよ。」

「驚いた、いつの間に彼氏になったんだ?俺は、」

「そんなに驚く事かな?」

「ああ、大の大人が真面目に玉子焼きを『おうじ焼き』って読むぐらいの驚きだ。」

それぐらいの驚きは、あるだろう。何せ今日初めて会話したヤツを彼氏と呼ぶのだから。…何で長谷川は笑ってるんだ?

「あはは、面白いね君!そう言えば自己紹介まだだったね。私は長谷川　亜稀。亜稀って呼んでね。」

笑顔で言われた……その笑顔は反則だな、やっぱり。しかも名前で呼べとか

「分かった長谷川、俺は、たな「高橋　昌哉でしょ。」…」

何で知ってるんだ?偽名を使おうとしてたのに被されたし。

「何で知ってんの?」

聞いてみるのが、一番だろ。俺ってそんなに目立った行動してない

はず

「逆に知らない人の方が少ないと思うんだけど…」

案外目立っていたらしい苦笑いしながら答えてきた。

「つーかさぁ、悠司に買って貰えばいいじゃん。」

言って

さぁ、問題です。なぜここで悠司の名前が出て来てのでしょうか？

正解は、悠司のハーレムメンバーだったからです。

簡単でしたね。皆さんわかりましたか？

えっ？弟と話してる時に特定の彼氏はいない的なこと言ったって？　まぁ～別に間違ってはないし、まだ悠司の彼女ってわけじゃないんだし　しかも2年生になってクラスが違くなってから悠司に会いに来てないんだよねぇ～学校の時は…だけど、それ以外の時に会ってるかもしれないけどそれは知らん！あまり興味がないから全然調べなかったし、でもチャンスはあると思うんだけどね（笑）　何となくだけど♪

それよりもどんな反応するのか、楽しみだなぁ～

「悠司って？ぅ～ん……あっ！もしかして木村くんのこと？」

頭をコテンと少し傾けて考える様にして、その後に思い出した様に

答えた。
……まさか悠司の名前を忘れているって、しかも予想外の回答きやがった。

「いやいやいや、何で今思い出したみたいに言ってるの？貴女が好きだった相手でしょ、しかも疑問係で返すなよ」

「え～だって、忘れてたんだもん。確かにあの時は好きだったんだけど…ねぇ、
あまりにも鈍感過ぎるから、諦めちゃった♪」

“諦めちゃった♪”だと　めっちゃ軽いなおい、しかも“♪”って何だよ！“♪”って！！その前に忘れていたとか、やっぱり忘れてたのかい。そんなに直ぐに忘れるものかねぇ～……ん？待てよ、これって……　良かったな、弟よ　チャンスがあるかもよ。

「……そうか、確かに悠司は鈍感過ぎるからな。たまにわざとじゃないかと思うときもあるからな。」

「そうそう……」

当初の目的の買い物を忘れて悠司の鈍感さを二人でずっと話し合

っていた　まる

終わり

母親って凄いよね。

ガチャ

「おかえりなさいませ、ご主人様♪」

金色の髪の色をしたショートヘアーの少し幼い顔だちの女の子が扉を開けた瞬間に現れて笑顔で言ってきた。
さて問題です。今俺はドコにいるでしょ？

ヒント

けしてメイドさん達がいる喫茶店には、行ってません。

正解は……

「そんな格好で何やってるの？母さん」

家でした。解ったかな？

解った人には、後でお兄さんが飴玉あげるからねミートソース味だけど。

えっ？そんな味あるのかだって？　あったんだよ、スーパーで買い物していたら見つけたんだよ、面白そうだから買ってみたんだけど……一回も食べてないだよね、普通に考えたらミートソース味の飴何て食べたくないし、今思うと何で買ったんだろう？　まっ、いっか　今度亮輔に食べさせれば、

そうそう話しを戻すけど、玄関を開けたら自分の母親がメイド服を着て出迎えしてるんだよ、あり得ないだろ普通は……年齢が三十路を過ぎてるオバｓ……　「……まーくん、ちょっとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩする？（ニコッ」…母親が着たって似合わないはずだろ？

だけど似合っているんだよね、困ったことに、見た目が若く見えるいや、若く見え過ぎるんだよ。前なんて一緒に（無理やり連れてかれた）買い物に行った時、ちゃんとした妹さんだね。って言われたんだけど、あり得ないだろ？１００歩譲って姉ならまだ分かる。な

のに妹って何だよ！？妹って！！どんだけわけぇンだよ！？　まぁ、それは置いといて

「もう一度言うけど、そんな格好して何してるの？母さん」

「ん？この格好？それはねぇ～、まーくんが喜ぶと思って着てみたの～、似合ってるかな？」

笑顔で話し始めて急に不安そうな顔になり、上目遣いでこっちを見てきた。その姿がとても可愛らしくて…………………………ってちゃんと待て！！何で母親とラブコメ的な展開になってんだ！？とりあえず落ち着け俺、こんな時は深呼吸だ。

ヒッヒッヒッフー、ヒッヒッヒッフー、

ってこれは違うだろう！！！！

「ぅ～～似合って、ヒクッ……なかっ…ヒクッ……たの？」

目には涙が一杯溜まっていて今にも溢れだしそうになっていた。

ダァ～～～～～～～～～～黙って考え事していたら、今にも泣きそうになってるし！

「に、似合ってるから、凄く可愛いから」

「ホントに？」

「本当だから！」

「ホントにホント？」

「本当に本当だから！！」

「じゃあ、今日一緒に寝ようね♪」

「分かったから……ハァ～」

何で否定しないの？と思ったと思ったでしょ？　大変何だよ、否定すれば折角泣き止みそうなのに、今度は完全に泣くんだよ！そしたらなかなか泣き止まないだよ……ハァ～。

◆
◇
◆
◇

話は変わるけど、いやそんなに変わらないか……どっちでもいいや、俺の母親は、人気アイドルグループが所属している会社の社長で家には、ほとんど帰ってこないだよ。だからって油断してた。クソッこんなことなら亮輔（変態）の家に泊まれば良かった。

話がズレだか、そのアイドルグループは、全員が（とはいっても3人だけど）高校生でその内の1人が内の学校にいるらしい。勿論変装は、している。

以上、昌哉でした。

「何やってるのまーくん？早く寝ようよ」

俺の服の袖をクイクイと引っ張って目をキラキラさせながら言ってきた。

「今、飯食ったばっかりだろ、せめて後1時間位は待てよ。今8時だぞ、そんなに早く寝たいなら、ハルと一緒に寝ればi…」

ハルの方をチラッと見た

「やだ、やだや〜〜だ、絶対にヤダ、まーくんと一緒に寝るの！！陽斗とは絶〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜対に寝ないの！！」

陽斗は若干泣きそうになっていた

……ハル、何と言うかドンマイ、俺もあそこまで嫌がるとは、

思わなかったわ。

「じゃあ、後2時間は待てよ。」

「…分かった。……ん～？あれ？1時間増えてるような？」

渋々納得した後に、口元に人差し指を置いて首をコテンと傾けて、考える様にして思い出したみたいに言ってきた。

チッ、気付きやがったかこうなれば、奥の手

「気のせいだって、あんまりそう言う事言うと、一緒にねt…」

「気のせいだよね。うん気のせい！時間になるまでテレビ観てくるね。」

トタトタとテレビがある方に行った。

これだから…

ピピピッ、ピピピッ、ピピ　ガシッ

目覚まし時計が鳴り、止め上半身を起こして身体を伸ばした。

「くぅぅ～、あ゛～～寝みぃ。」

昨日は、あのあと一緒に寝たのは良かったんだよ、いや良くはないけど、まだな、寝るだけなら、布団に入ってから、３時間位仕事の愚痴を言って満足したのか、俺の右腕を抱き枕にして寝やがった。そのお陰で、２つの大きな山が、ね？それはまだ、ましなんだよね。毎回やってくるから、しかし、我ながら変なことに耐久出来ちゃったな？まっいいや、

ふと、時計の方を見ると7時３０分だった。

「久しぶりに弁当でも持っていくかな。」

毎日昼は、学校の購買で買ってるから金かかるし　あ゛～弁当作るの面倒くせぇ、作らせるかな？などを思いながら階段を降りてリビングに向かった。

□■□■

ハルがテレビを見ながら、朝食を食べてた。俺が降りてきたのを気付いてこちらを向いた。

「あっ、兄貴おはよう。」

「ハル、はじめに言っとく、ありがとう。」

「な、何が？」

キョトンとした顔で聞いてきた。ここは、やはり笑顔で

「弁当作って♪」

「嫌だよ！！……って弁当なら、母さんが作ってくれたみたいだよ、俺たちの分。」

ほら、と言ってキッチンの方を指差しキッチンの方を見ると2つ弁当箱があった。……うん。今日は、生徒会の人に分けてもらおう。けして、母さんの料理が下手で壊滅的な味という訳でなく、どちらかというと普通に旨い分類に入るでも弁当にいらんデコレーションがあるんだよ。ということで

「やっぱいらないわ、ハルにあげる。お前なら食えるだろ？マザコン。」

「いや、さすがに2つは無理だよ！！」

すぐさま否定してきたしつーかマザコンの部分はスルーかよ

「せっかく、母さんがハル為だけに作ったのに残すのか、あ～ぁ」

わざと為にを強調して言ってみた。ハルはマザコンだから効果は

抜群のハズ

「俺の為に…」

ハルがぶつぶつ呟いていた。あと一息だな

「悲しむだろうな～もしかしてハルのことき r「2つ食べるよ！」

……」

ニヤリ、予想通り。さすがは、マザコンだな。……はっ！！もしかして彼女が出来ないのって（……）

って面倒くせぇ、何で朝からハルのこと考えなきゃいけねぇんだ。

ふぁー　寝みぃ

そう言えば、母さんはもう家にいなかった。どうせ今月はもう帰って来ないだろう。社長だから忙しいだろうし。

□■□■

キーンコーンカーンコーン

起立、礼。

四時間目の授業が終わり、学級委員の人が号令をかけた。
さて、生徒会室にでも行って食料調達にでも行くかな？そう思い席を立とうとすると、話をかけられた。

「あれ？今日は買ってきてないの？」

大地が弁当を持ちながら近付いてきた、爽やかな顔しながら

「死ねばいいのに」

「ちょっ、いきなりひどくない！？」

「あ？声に出てた？わりぃ、気にするな本音だから。」

「本音！？本音なのかよ！気にするわ！！」

「全く、弁当を持って現れたと思ったら、人の席の近くで騒ぐなよ周りに迷惑だろ。」

はぁ～これだから、イケメンは困る。

「原因はマサだろ！！」

まだ、騒いでるし、つーか腹へった早く生徒会室に行って食料調達しなきゃな

「じゃあな、俺は食料調達に行ってくるわ。」

そう大地に言い扉の所まで行き開けようとしたら、自分が開けようとする前に開いた。

ガラガラ

「あっ、昌哉さん。ちょうど良かった、これお兄ちゃんに渡してもらえますか？」

扉の向こうには、悠司と同じで少し茶色がかった髪色で長い髪をサイドテールにしている、美少女が持っていた弁当をこっちに向けている。わかっている通りこの美少女はリア充こと、悠司の妹さんです。この妹さんは、”実は、私たちには血縁関係がない義兄妹なんだよ。”とかを言う程の重度のブラコンだった。っと言っても、兄は兄で重度のシスコンだからな……なぜ、”だった”というと、最近は、悠司に対して冷たい態度をとっているんだよね～ツンデレか？と思ったけど、違うらしいんだよね、前なんて、悠司が抱きつこうとしたら、”いや、触らないで！！”ってめっちゃ拒絶してたし、それを聞いた悠司は真っ白になってたけど、あの時の顔は面白かったなぁ～写メ撮っておけば良かった。

……ん？ちょっと待てよ、もしかして最近のツンデレはツンが１０で残りの０がデレなのか！？　な訳ないか、妹さんは１年生でハルと同じクラスらしい

悠司に弁当を渡せと……ここは、やっぱり美少女の頼みだから……

「だが断る。」

うん、やっぱり断るのが一番だな。楽しようという考えが甘いんだよ。社会は、そんなに甘くないことを教えてあげないとな特に後輩にはな。

「悠司の妹さんや、それぐらい自分でやりなさい。俺はこれから生徒会室から食料調達するという大事な任務があるんだ、それに悠司は妹さんが直接渡せば喜ぶだろ？うざいくらいに。」

「そうですか…」

少し考えてから

「…それなら、コレ食べて下さい。」

と、こちらに弁当を渡した。

は？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1650s/

脇役主人公から見た彼ら

2011年11月5日03時19分発行